

三河地震から80年 地震と戦争

令和6年11月30日(土)～令和7年2月2日(日)

一色学びの館企画展

三河地震から80年 地震と戦争

令和6年 11/30 [土] ▶ 令和7年 2/2 [日]

西尾市立一色学びの館 多目的室
愛知県西尾市一色町一色東前新田8

開館時間／午前9時～午後7時
休館日／月曜日[1/13(祝)は開館]
年末年始(12/29～1/3)

主催/西尾市立一色学びの館
協力/八幡山 殿西寺・ピースあいち・三河地震震災犠牲者追悼実行委員会

地震小僧が地中生活の/西尾市教育委員会提供(昭和47撮影)

戦後の西尾の風景/西尾市教育委員会提供(昭和47撮影)

地震遺形
昭和19年12月7日東南海地震の名古屋地方気象台の地震計で観測された震害(大車震)
(写真行本ホームページ)を加工

昭和20年1月13日午前3時38分、三河地震が愛知県を襲いました。

三河湾を震源とするこの地震は局地的な大被害をもたらし、特に西尾市域では死者1,209人、建物の全半壊15,000軒以上という甚大な被害を受けました。しかし、当時は戦時下で報道管制が敷かれていたために広く報道されることはなく、約1ヵ月前に発生した東南海地震とあわせて「隠された地震」とも呼ばれています。

報道管制のほかにも、物資・人不足による救助や復興の遅れ、疎開児童の犠牲など、戦争の影響を大きく受けた地震でした。

2025年は三河地震および終戦から80年の節目の年にあたります。本展では、かつて西尾市で起こった地震を紹介するとともに、写真や新聞、体験談などを通して三河地震を振り返ります。

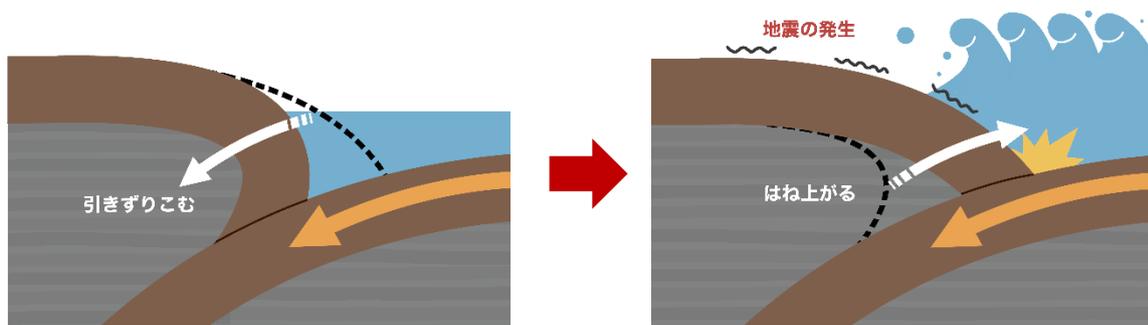
第1章 地震ってなに？

地震は地球の表面をおおっている十数枚のプレートとよばれる固い岩石の層で起こる現象です。プレートはゆっくりと動いており、大きな力が加わっています。その力に耐えられなくなって、プレートがずれたり、大きく動いたりして地震が発生します。

日本列島の周りは4枚のプレートがぶつかり合う場所で、世界的に見ても多くの地震が発生する地域です。日本最古の勅撰歴史書である『日本書紀』にも地震についての記述があるように日本は古くから地震に襲われ、その度に復興してきました。

海溝型地震（プレート境界型地震）

陸のプレートと海のプレートの境目で発生する地震です。プレートの境界で起こるため、被害が広範囲に及び、津波が発生することもあります。

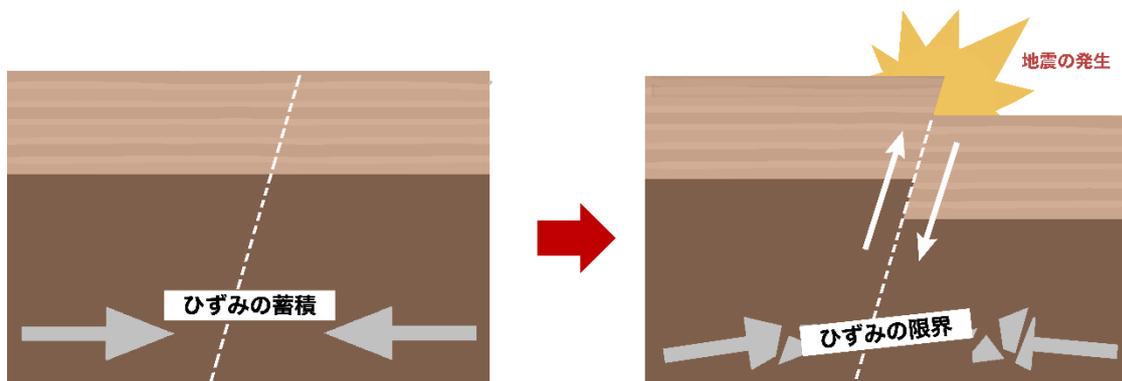


陸のプレートの先端が引きずりこまれ、ひずみが蓄積する。 ひずみが元に戻ろうとして地震が発生する。

【参考】気象庁ホームページ「特集 地震を知って地震に備える！」

活断層による地震（内陸地震、直下型地震）

陸のプレートの内部で発生する地震です。海溝型地震に比べてマグニチュードの小さい地震が多い一方、浅いところで発生するため、大きな被害をもたらします。



プレートの動きによる強い力がかかり
岩石の層の弱いところにひずみが蓄積する。

ひずみが限界に達すると弱い所がずれて
地震が発生する。

【参考】気象庁ホームページ「特集 地震を知って地震に備える！」

第2章 西尾市域の地震

西尾市の地形は主に、美濃三河高原とよばれる山地、碧海台地とよばれる小高い台地、西三河低地の3つに分けることができます。

西三河低地は美濃三河高原と碧海台地の間に広く分布している低地で、川や海の働きによって形成されました。主に固まっていない泥や砂、石などで形成されたやわらかい地盤で、地震に弱い傾向があります。

また、太平洋沿岸にはユーラシアプレートとフィリピン海プレートが隣接する南海トラフがあり、南海トラフ地震による被害もたびたび受けてきました。



西尾市周辺の地形

「数値地図 25000（土地条件）」（国土地理院）を基に作成

コラム 安政地震となまず絵

嘉永7年（1854）11月4日、5日に発生した安政東海地震、安政南海地震の被害は、日本列島の広範囲におよび、西尾市域でも被害があったことが記録に残っています。安政年間前後はこの2つの地震だけでなく、善光寺地震（1847年）や飛越地震（1858年）など大きな地震が立て続けに起こった時期で、特に、安政江戸地震は江戸の町を直撃したこともあり、大きな被害をもたらしました。



『(ひょうたん鯨)』

国立国会図書館デジタルコレクション

そのような中、ナマズが地震を起こしているという伝説をもとに、地震で混乱する社会を風刺する錦絵（なまず絵）が広く出回るようになりました。

はじめは「地震よけのお守り」としてナマズを懲らしめている絵が好まれましたが、地震の復興で好景気になると、ナマズは「世直しなまず」として良いものとして描かれるようになります。

西尾市域で発生した地震年表

年	西暦	月	日	内容
霊亀元年	715	5	26	三河に M6.5～7.0 の地震
応永 7 年	1400			東海、特に三河の地震が甚大だった
永正 7 年	1510			三河で大地震
天正 13 年	1586	11	29	大地震。飢饉や疫病で多くの死者が出た。
天正 17 年	1589	2	5	遠江で M6.7 の地震。三河で強くゆれる。
宝永 4 年	1707	10	4	(宝永地震) 南海トラフ沿いを震源とする M8.6 の巨大地震。震域は関東～九州、太平洋沿岸に津波。死者 2 万人以上。三河・尾張の死者は 19 人。 ・津波で金蓮寺の堂に魚蟹が上がった ・大岡新田が水没し、17 人の村人は隣村大戸村の堤下に仮小屋を建てていた。二年後、西尾藩主土井利意が領内巡見の際にこのさまを見て、村民を羽塚山と戸ヶ崎山に移住させた。 ・治明丑新田、坂田新田では堤防破壊、津波が侵入して亡所となる。
宝永 7 年	1710			地震で矢作川の水が引き、船が不通となる。
享保元年	1716	9		地震で岩井新田(のちの中根新田)が破壊。
文政 2 年	1819	6	13	大地震。綿、とうきびなど不作。
嘉永 7 年	1854	11	2	(安政東海地震) M8.4 の巨大地震と津波が関東～四国地方を襲う。死者 2～3 千人。この地方も家屋倒壊や新田堤防の決壊、液状化などの被害があり、津波が平坂・寺津・一色・小山田・饗庭村を襲った。江原村に断層が生じた。西尾城新門の一の門、二の門、姫丸門などが大破。
			5	(安政南海地震) M8.4 の巨大地震と津波が東海・近畿・四国地方を襲う。余震が 12 月 7 日まで続く。この地方でも八幡川田村で堤防が破損した。
安政 2 年	1855	10	2	安政江戸地震。江戸で M7.0～7.1 の大地震。この辺は中地震。
万延 2 年	1861	2	13	西尾で強くゆれる。各村の常夜灯などが倒壊した。
明治 24 年	1891	10	28	(濃尾地震) 岐阜西部を震源とする M8.0 の大地震。宮城～鹿児島までゆれが観測された。全国で死者 7,273 人。市域の家屋等全壊 280 軒、死者 6 人。小栗新田の堤が全壊。
昭和 19 年	1944	12	7	(東南海地震) →詳しくは P.4 以降へ 東南海沖を震源とする M8.4 の大地震
昭和 20 年	1945	1	13	(三河地震) →詳しくは P.4 以降へ 震源を渥美湾北岸とする M6.8 の直下型大地震。戦時下の報道規制や物資不足のため、救援や復旧活動は困難を極めた。

※【参考】『災害記録を読む』西尾市岩瀬文庫編、『愛知県被害地震史』愛知県防災会議地震部会編
 ※現存する文書・文献の災害記録をもとに作成しているため時期や地域に偏りがあります。実際はもっと多くの災害が広範囲にあったものと思われます。
 ※万延以前の月日は旧暦で表しています。

第3章 地震と戦争

三河地震が発生した昭和20年ごろは第二次世界大戦の最中で、日本の敗戦が色濃くなった時期でした。空襲に備えて「灯火管制」や疎開が行われ、武器にするために金属を供出し、食べ物や生活に必要な物の多くが配給制になるなど人びとのくらしは戦争一色となっていました。

東南海地震

愛知県・三重県・静岡県に被害が集中し、死者は1,223人におよびました。三重県の海岸沿いを中心に津波の被害も発生しています。愛知県では438人の死者が出ており、その約半数は軍需工場の倒壊によるものでした。

発生時刻	昭和19年12月8日 午後1時36分
震源	三重県南東沖
規模	M7.9

町村	世帯数	全壊		半壊		死傷者	
		住家	非住家	住家	非住家	死者	傷者
西尾町	4,422	142	275	350	296	4	3
平坂町	2,332	206	250	189	319	3	12
寺津町	1,228	26	92	132	93	3	0
福地村	1,226	553	477	699	674	21	31
三和村	952	17	32	78	78	0	3
室場村	406	3	11	7	5	0	0
米津・南中根	512	7	44	13	10	1	0
一色町	3,770	505	468	1,019	505	13	26
横須賀村	1,921	79	98	164	116	2	4
吉田町	1,663	198	106	419	176	9	5
幡豆町	1,939	0	7	2	7	0	1
佐久島	301	0	0	0	0	0	0

西尾市域の被害状況（『西尾市史』巻一 自然環境 原始古代「表121 幡豆郡内震災被害調査」を基に作成）

西尾市域では震度5～7のゆれがあったとされ、特に福地村は愛知県で唯一震度7と判定されています。

三河地震

東南海地震から37日後に発生した直下型地震で西尾市や安城市、碧南市、蒲都市などの狭い範囲に大きな被害をもたらしました。

発生時刻	昭和20年1月13日 午前3時38分
震源	三河湾
規模	M6.8

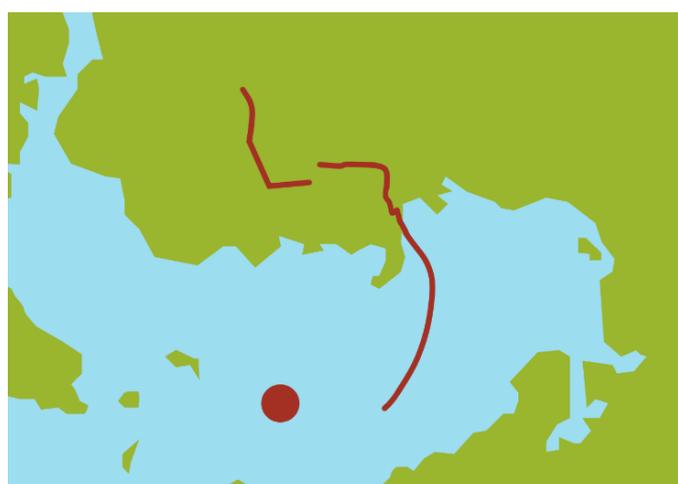
全体の被害は死者2,306人、全半壊住家23,776軒で、西尾市域では1,209人が亡くなりました。被害が大きくなった原因として、約1ヵ月前に発生した東南海地震の影響が挙げられます。東南海地震によって傾いたり、ゆがんだりした多くの家屋が三河地震のゆれで完全に倒れてしまったのです。

また、三河地震が発生したのはほとんどの人は眠っている真夜中だったため、たくさんの人が倒れた家屋の下じきになってしまいました。

町村	世帯数	全壊		半壊		死傷者		住家全壊率 ※東南海地震含む
		住家	非住家	住家	非住家	死者	傷者	
西尾町	4,422	760	1,070	1,880	2,070	175	350	20.4%
平坂町	2,332	223	261	375	480	15	233	18.4%
寺津町	1,228	130	260	650	380	57	323	13.5%
福地村	1,226	455	850	不明	不明	229	296	82.2%
三和村	952	544	491	543	685	196	259	58.9%
室場村	406	77	27	170	17	18	50	19.7%
米津・南中根	512	193	176	194	187	75	84	—
一色町	3,770	256	351	768	364	80	不明	20.2%
横須賀村	1,921	760	400	727	253	268	530	43.7%
吉田町	1,663	422	119	394	523	96	不明	36.7%
幡豆町	1,339	14	63	212	201	0	3	1.0%
佐久島	301	0	0	2	0	0	0	0.0%

西尾市域の被害状況

(『西尾市史』巻一 自然環境 原始古代「表126 幡豆郡被害調査」「表127 住家全壊率」を基に作成)



三河地震による地表地震断層の概略(●は震央)
『1944 東南海・1945 三河地震報告書』中央防災会議
(2007年)を基に作成

三河地震では、形原町(現蒲郡市)から深溝(幸田町)を経て、志籠谷町(西尾市)に至る延長18kmの断層が地表に現れました。

この断層を境に一方の地盤(上盤側)がもう一方の地盤(下盤側)にのしかかるように動いたため、上盤側の被害が大きい一方で、下盤側ではほとんど被害がないという場所も見られました。

深溝には現在も断層が保存されており県の天然記念物に指定されています。

報道管制

当時、政府は日本軍の不利になるもの、戦争に影響を与えるものの報道を制限する「報道管制」を行っていました。東南海地震と三河地震で大きな被害を受けた東海地方は、軍需工場が集中している地域であったため、2つの地震はほとんど報道されませんでした。そのため、被害の実態が近年まであまり知られておらず、東南海地震や三河地震は「隠された地震」とよばれることもあります。

全国紙では裏面に小さく「東海地方に地震 被害、最小限に防止」程度にしか報道されず、各地からの支援不足につながりました。

学童疎開

日本本土空襲が行われるようになると、各地の軍需工場や人口の多い都市部が目標になり、名古屋市の子どもたちを他の場所へ避難させる「学童疎開」が行われ、西尾市域でも6つの国民学校の疎開を受け入れ、市内の寺が宿舎になりました。

しかし、三河地震により寺の本堂が倒壊してしまい、そこで寝泊まりしていた多くの児童が犠牲となりました。本堂は屋根が重くて壁が少なく、地震にあまり強くない建物です。戦争中でもなければ本堂で寝泊まりする人は少なく、戦争中だからこそ起こってしまった悲劇でした。

学校	犠牲者数	疎開先
大井国民学校	児童 31 人 教師 1 人	三和村
江西国民学校	児童 8 人	吉田町
明治国民学校	児童 1 人	西尾町
飯田国民学校	児童 3 人	横須賀村

西尾市域で犠牲になった疎開児童の人数
『恐怖の M8』中日新聞社会部より

物資不足



地震小屋の並ぶ中央通り

(萩原律撮影／西尾市教育委員会所蔵)

工作隊によって仮設住宅が建てられても余震を恐れて地震小屋で生活する人もいました。

県や町村は被災者に対して特別配給を行いました。戦争による物不足のため、被災者の生活を支えるのに十分な量の支援は行われませんでした。住家に対しても同様で、仮設住宅を建てるための釘や木材が足りず、倒壊家屋のものも再利用しました。

また、若い男性の多くが戦争に行ってしまい、人手も不足していました。そのため復旧作業は親せきや地域の人びとを中心に行われました。建物の修理や建設といった専門的な技能が必要な作業には「工作隊」などが派遣されました。

第4章 地震と継承

西尾市では三河地震の犠牲となった方の法要や、あまり知られてこなかった三河地震を周知するための活動が地元の人びとによって行われています。

安喜福会（三和地区）

戦時中、当地には大井国民学校の児童が戦禍をのがれ、学童疎開をしていました。

しかし、三河地震によって、疎開先の3ヶ寺（安楽寺・妙喜寺・福浄寺）の本堂は大音響とともに倒壊し、多くの児童がふとんの中で圧死してしまいました。

「安喜福会」は戦後、大井国民学校の関係者やPTA、地元の関係者によって結成された会で、犠牲者の出た3ヶ寺から1字ずつ取って命名されました。毎年1月13日には追悼法要が行われるほか、三河地震の写真展示、経験者の体験談のDVD作成など、三河地震を後世に伝える活動も行っています。

安楽寺	3年生 男女8名
妙喜寺	3年生 男女12名 教師1名
福浄寺	5年生 男11名

巖西寺（今川町）

学童疎開の受け入れ先にもなった巖西寺では、平成17年（2005）に「三河地震と終戦六十年記念展」を開催しました。戦死した藤原肇住職の叔父・寛さんの手紙のほか、地域の人たちなどからの聞き取り調査をもとに町内の家屋の倒壊状況を落とし込んだ地図も紹介し、展示から戦争の悲惨さや巨大地震への注意喚起を訴えました。

コンクリートでつくられた釣鐘（巖西寺）

戦時中、多くの寺の釣鐘が金属供出に出されてしまいました。そのような中、巖西寺では鐘撞堂のバランスが崩れて倒壊しないために金属の釣鐘の代わりにコンクリートでつくられた釣鐘が吊られましたが、三河地震では倒壊してしまいました。当寺では三河地震と戦争を象徴するものとして、本堂の前に安置されています。



主催
西尾市立一色学びの館

協力（敬称略）
八幡山 巖西寺、ピースあいち
三河地震震災横死者追悼式実行委員会

